

# 圖版要項

一四 那智瀧圖 東京 根津美術館藏

絹本着色 挂幅装 竪 一五九・〇釐（五尺二寸五分）  
横 五七・八釐（一尺九寸六分）

幅小長大なる絹本一幅一鋪の大部を占むる崎嶇なる崖壁の中央を貫いて鬱蒼たる樹林の間より奔出し直下する白一條の飛瀑、その落水巖に激して三叉の溪流を作り岩間に隠見しつつ潺湲の響を散ずるところ老杉數株聳立して切妻の上半を現はせる拜殿を圍み、更に屋蓋の左肩のあたり一杉樹の傍に一基の卒塔婆ありてその由ある神域なることを想はしむ。前景の社殿より溪流を溯り中景瀑布の線に沿うて遠景の山嶺に眼を移せば山の端近く圓かなる日輪かかる。構圖簡率なれども頗る自然にして能く遠近の感を出せり。傳彩また敦厚、俗緒を主調としてこれに綠青、群青、朱墨を効果的に配したる斷崖の岩肌に金泥の暈を施しなどし、穠麗なれども浮華に陥らず全體穩雅なる色調の中に胡粉に淡墨の線を混へたる飛泉飽くまで白く印象極めて鮮明なり。實景を精寫して神韻清暎、裡に一味幽邃深祕の感を藏す。

これ落差八十餘丈の名瀑那智一の瀧を描ける大和繪風景畫の冠冕として、將又熊野三所權現の一にして院政時代以降上下の信仰殊に篤かりし飛瀑權現の象を此自然景そのものに表はせる異例の垂跡畫として夙に世に喧傳せらるる名幅『那智瀧圖』にして本誌讀者の已に熟知せらるるところ、今更喋々の解説を要せざるべし。

然はあれども翻つて私かに惟ふに本幅の藏する未決の問題猶尠からず、此著名の傑作にして巨勢金岡筆の傳稱の他未だ作者の所屬の推定せられたるを聞かず、ただ畫中の卒塔婆の弘安四年龜山法皇御來詣の砌建て給ひしものとの認定

に依り上記傳稱を否定し、漢畫の影響を示す畫法と金泥の暈など施せる新様の賦彩と併せ見て漠然該年を上限とする鎌末巨勢派の尤作なりと爲すに留まり、斯幅の本邦繪畫史上に占むべき位相に至つては未だ必ずしも明確ならざるが如し。

斯幅は果して通途の熊野曼荼羅の類と等しく唯禮拜の對象として奈良繪佛師の手に爲りしものか、或は禮拜の意ありとするもそれは單に副次的動機に過ぎず寧ろ作者が眞率なる自然觀照より發する醇乎たる風景畫的作因に依りて生れしものか。本圖に先行せる或は追蹤せる同題の作品ありや無しや。今通說に従つて山嶺の圓光をよしなに日輪とは記しつれどこれ或は月輪にはあらざるか、

（歲月久しくして補絹補色からず當初の色彩を彷彿するに由なれど少くも現時の重澀幽晦なる色調よりみるときは光采陸離たる朝暎とせんよりは清淨寂光の月明と見做す方一層安かならずや。縱令彼の圓光は神體を暗示すべき象徵にして實景の直寫たることを要せずとするも本宮の本地阿彌陀に對して兩所權現の本地觀音勢至なりとせば愈月輪とする方相應はしかるべし。）更に現在幅の法量は果して原初の全幅を示すものか、（鎌倉時代の挂幅として他に殆ど類例なき長幅の比例は直ちに兩側の截斷を想はしむるも畫面の狭小は取題の然らしむるところ、予としては寧ろ上下の切截ありしものと想像せざるを得ず。少くも下部の拜殿の屋蓋のみを半ば現はしたる現狀は頗る暗示的にして成功せるが如くなれども當時としては些か斬新奇抜に過ぎずや。況して垂跡畫として作られしものとすれば禮拜の場たる拜殿を半截するが如きは當時として似合はしからず感ぜらる。）

如上舉げ來れば疑念は接踵繼起して盡きず。もとより今此等の諸問を精査検討して之に解答を與ふるの用意あるにあらず又その暇なし。ただ些か疑念を提げて先輩諸賢の示教に俟つのみ。